20111203
神戸市教育委員会

# 潤和横尾遺跡現地説明会資料

## はじめに

潤和横尾遺跡は、東西に伸びる標高 54～68m前後の丘陵上に立地する弥生時代の遺跡です。丘陵の南側裾には弥生時代の馬掛原（うまがけはら）遺跡、高津橋大塚遺跡が、谷を挟んだ東側の丘陵上には天王山古墳群、白水瓢塚古墳が存在します。

## 調査概要

現在発掘調査中ですが、これまでに弥生時代後期の竪穴建物 11 棟以上・土坑・落ち込み状遺構、溝状遺構などが尾根上の平坦部で見つかっています。

竪穴建物の中には、規模の大きなものが 3 棟あります。いずれも円形で、建物 1 が最も大きく、直径 11.5mで、次いで建物 9 が直径約 10m、建物 8 が直径約 9mです。その他の建物は、直径または 1 辺が 5 m前後の円形もしくは方形です。

建物 7 は、斜面に造られているため、床面の一部が失われていますが、火災によって焼け落ちた建物部材が炭化して残っていました。建物 2・3 および 8・9 は、比較的近接して築かれているため、同時期に存在したとは考えにくく、時期差があると考えられます。しかし、建物内部や周囲からの遺物の出土量がきわめて少なく、生活が営まれた時間は短かった可能性もあります。

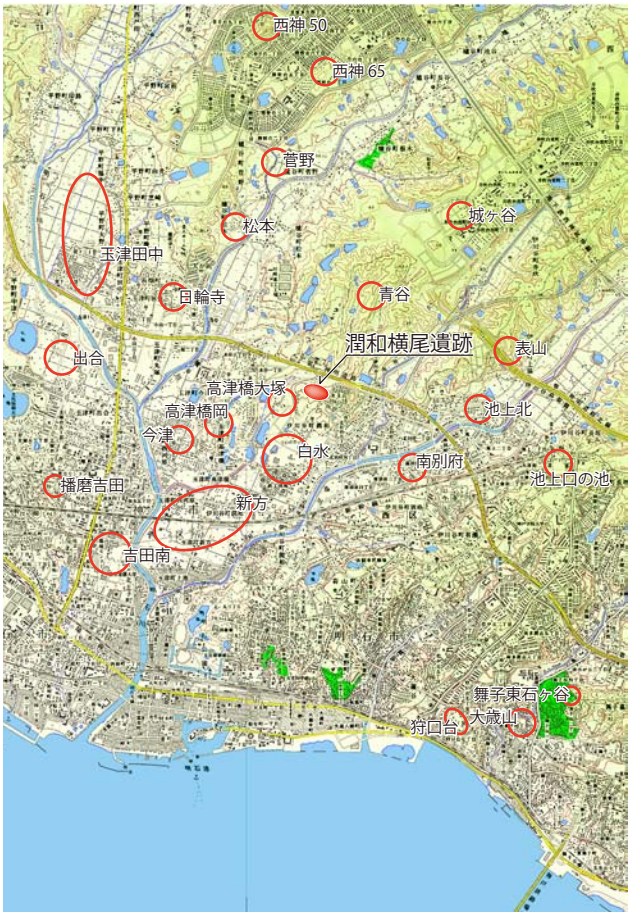
各建物から出土したわずかな土器から、この集落は弥生時代後期初頭から前半にかけて存在していたと考えられます。

## 調査成果

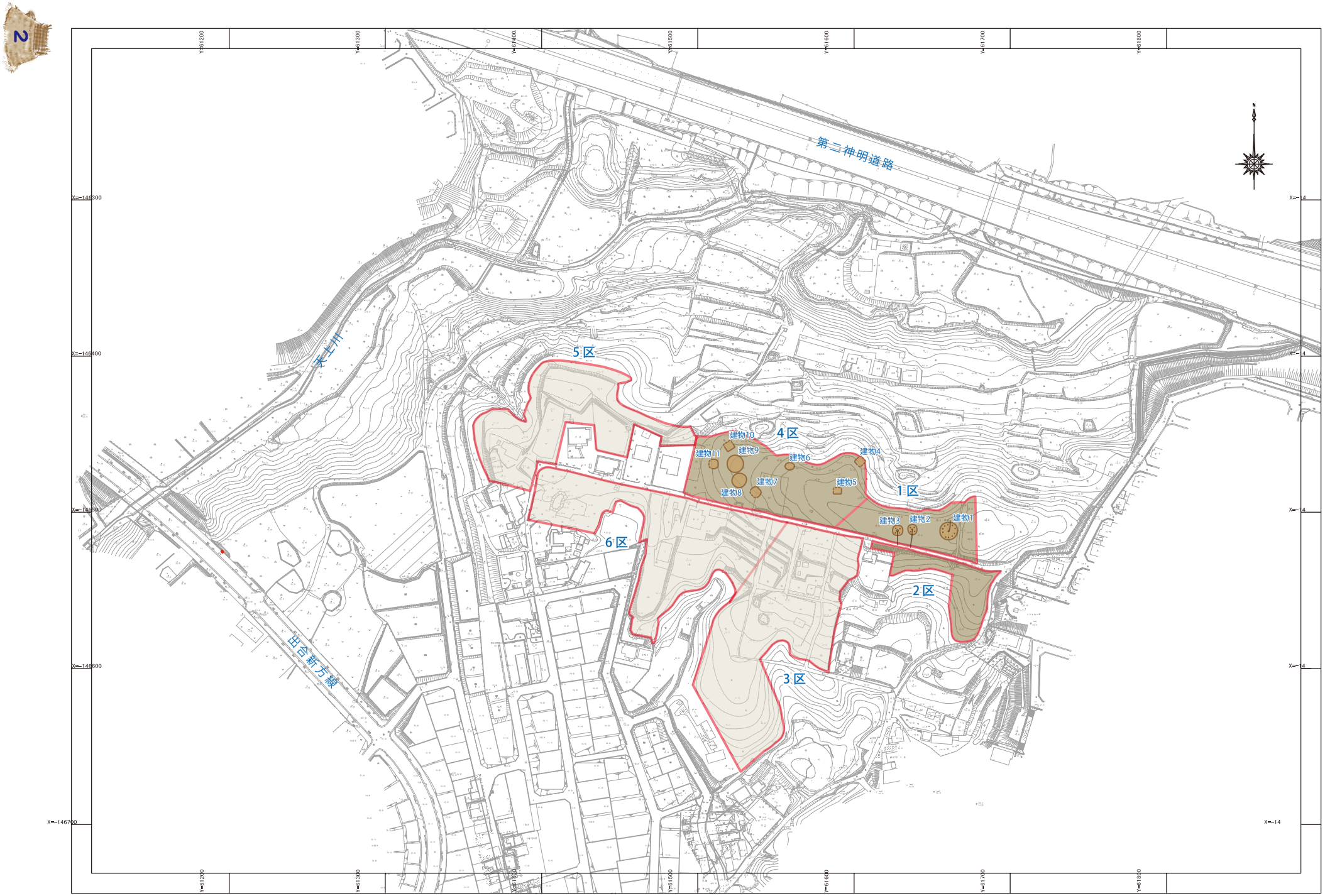
弥生時代中期末から後期にかけて、山の上に集落が営まれた遺跡を高地性集落と呼んでいます。明石川流域には、西神ニュータウン内第 50 地点遺跡、同第 65 地点遺跡、青谷遺跡、城ヶ谷遺跡、表山遺跡、頭高山遺跡など、数多く存在します。

このような高地性集落が営まれた理由のひとつとして、広範囲で紛争があったために見晴らしの良い場所に集落を築く必要があったと言われています。

後期初頭から前半に活動した明石川流域の高地性集落は、表山遺跡、城ヶ谷遺跡、青谷遺跡、そしてこの潤和横尾遺跡です。明石海峡を望むことができるこの位置に集落が存在したのは、戦いに備えるためだったのでしょうか。あるいは、大規模竪穴建物の存在を評価し、何らかの工房であったと考えるのが妥当でしょうか。いずれにしても、今後の調査成果が期待されます。




潤和横尾遺跡と周辺の主な弥生遺跡


2
第三神明道路
天上川
出合新方線
1区
2区
3区
4区
5区
6区
建物1
建物2
建物3
建物4
建物5
建物6
建物7
建物8
建物9
建物10
建物11
N

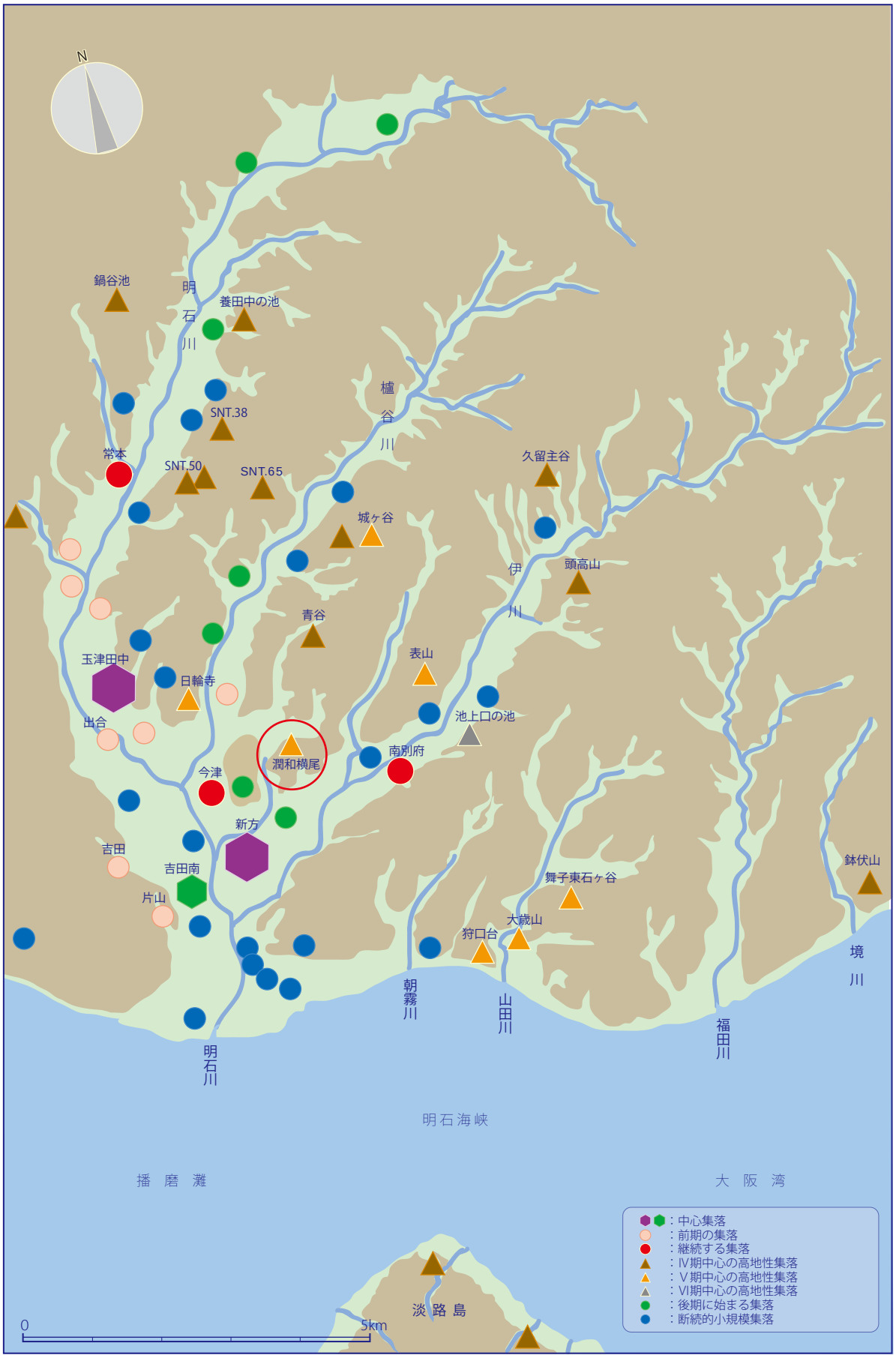
遺跡からの眺望（明石海峡、淡路島を臨む）

1区（西から撮影。手前から建物3・2・1）

1区（東から撮影。手前から建物1・2・3）

斜面に建てられた建物11

火災で焼けた建物7




明石川流域の弥生時代集落遺跡

今回の発掘調査および現地説明会の開催にあたっては、神戸市潤和山の手台土地区画整理組合のご協力を得ました。